

---

# 剣城京介と魔法少女

パイオネット

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

剣城京介と魔法少女

### 【Nコード】

N1681Y

### 【作者名】

ペイオネット

### 【あらすじ】

これは自分の頭の中で考えたもしも児童漫画のキャラが深夜向けのアニメのキャラとコラボしたらと考えた結果、こうなりました。

その日は俺にとって不思議な体験だった。

俺は病院にいる兄のお見舞いに行った後病院の外の白い壁が黒いシミのようなひびが入っていた。

俺はそれに触った時、

「うわっ!？」

突然、ひかりだして目をつぶった。

目を開けた時、俺は何故か知らない部屋で寝ていた。

時計を見た時、時間は6時半だった。

俺は服を探していた時、自分の着ていた制服はなくなたままたまタンスの中にあつた私服を着て、外に出た。

外に出た俺は街の方はただ普通に笑ったりお茶を飲んだりしている奴らは多かった。

その時、俺が見た物は白い壁のところには黒い空間が漂っていた。

そして俺はその空間に手を差し伸べそうとしたが

「ここは・・・」

俺が入った空間はどす黒い空間が漂い、そしてどこかの芸術者が書いた絵の生き物がいた。

「なんだ？ あのドアは」

俺はそのドアを開けた。そして俺が見たものは・・・

金髪の少女が銃を何本も振り回し、謎の丸い生物を蹴散らしていた。

「すごいよ！！ マミちゃん」

俺はそこにあったいちごのところに隠れて彼女たちを伺った。

そして俺はあのピンク色の髪をリボンをつけている少女が金髪の少女を尊敬している目で見っていた。

「なんだ？ あいつ あの金髪のことに憧れているのか？」  
俺は呆れて帰ろうとした時、

「待ちなさい」

後ろを振り向くとそこに立っていたのは、黒髪のロングヘアーであり、腕には盾のようなものがつけられていた。

「アナタ・・・どうやってこの空間に入ったの？ それにアナタの中に私達の知らない力があるらしわね」

「奇遇だな俺もこの空間に入る前から何がなんだか、よくわからないんでな」

「・・・・・・・・アナタ名前は」

「剣城 京介」

「剣城 アナタは一体何者なの？」

「俺は雷門中でフィフスセクターのシードだったサッカープレイヤーだ」

それを聞いた少女は少しだけ首を傾げた。

「雷門中？ フィフスセクター？ シード？」

「そんなことよりお前は誰だ？ それにあの戦っていた奴らを知っているのか？」

俺は少女を指を差しながら質問した。

「私は暁美ほむら見滝原中の生徒よ あれは巴マミが変身した魔法少女よ」

「魔法少女？」

俺はほむらの言った単語にキョトンとした。

「魔法少女？ そんなものはテレビの中の存在だ！？」

「・・・あなた、そのテレビの中の存在が今いるのよ」

確かにほむらの言つとおり、それが今現実にいるのだ。

「どこに行く？」

「巴マミと鹿目まどかのところよ 今あの二人は美樹さやかとキョ

ウベえを助けるために魔女の館に行ったのよ」

「魔女？」

俺はまたほむらの言ったことに首を傾げた。

「……あなたには関係のないことだけど、特別に教えてあげるわ」

ほむらは俺に特別に魔女に関する情報を教えた。奴らは人間の歪んだ感情から生まれる生き物、そしてそいつらを倒すためにキュウベえと契約して魔法少女になって戦うということだった。

「あのピンク髪の天然娘もあの魔法少女に憧れる目をしていたぞ。そいつらがいるんだったら安泰って所じゃねーか？」

ピンク髪の天然娘というのはまどかのことである。

「……せない」

「んっ」

「あの子だけは……まどかだけは……魔法少女にさせない!」

そういつてほむらは鹿田まどかと巴マミのところに行って行った。

「おい!!　それはどういことなんだ」

俺はほむらに叫び、後についていった。

「なんだあれは？」

俺が見たのは、椅子が浮かび、その上に垂れているような人形が座っていた。

「おい！　アイツの加勢をしてやらないのか!？」

俺はほむらに言ったが

「無駄よ　・・・巴マミはこの場所で死ぬわ」

「それは・・・本気で言ってるのか？」

「ええ、バマミが死ねば、あの二人は魔法少女に憧れることはないわ」

ほむらの言ったことを聞いた俺は何故か胸が締め付けられるような感じだった。

(なぜだ・・・なぜこいつは人が死ぬことがわかっているのにあんなに平然に見ている)

その時、バマミは魔女をリボンに締め付け、最後に大型のマスケット銃を出した。

「ティロ フィナーレ!!」

バマミの必殺技で魔女に炸裂した。

「やった!!」

それを見ていた美樹さやかと鹿目まどかは喜びの歓声をした瞬間

「えっ」

必殺技を炸裂した魔女は口から体はヘビのようで顔はピエロのような怪物だった。

そいつはバマミのところ近づき、大口を開けて、バマミを食う直前だった。

(なに 固まっていやがる!!? はやく逃げろ!!)

俺はバマミを見てまた胸が締め付けられるような感じだったその時、俺は

「ちい!!」

俺は前に出て下のクリームの上に埋もれていたあめ玉を足で取った。

「剣城!! 何をする気なの 魔法が使えないあなたは魔女に勝てる訳ないわ!? 戻りなさい!!」

俺はほむらの忠告を無視して、あめ玉を足から放して、足で思いつき蹴り上げた。そして、あめ玉は黒い霧のようなものに包まれた。

「デスソード!!」

拳を振り下ろした時、黒く包まれたあめ玉は大砲のように発射され、それを魔女の頬に直撃した。

「剣城!?!」

ほむらは剣城の有り得ない光景を見て啞然とした。

「・・・ハッ あの子は」

巴マミは正気に戻り、今助けた俺を不思議そうに見ていた。

「・・・すごい」

「なんだよ あいつ、あんなすごいシュートが撃てるなんて」

鹿目まどかと美樹さやかは啞然とした。

「へー彼はどうやら魔法少女じゃないねだけど、あの力は魔法少女の域を越えているよ。」

「えっ そうなの キュウベえ?」

キュウベえの言ったことに鹿目まどかは不思議そうに俺を見ていた。

魔女は今のシュートがきいたのか怒りの形相で俺を睨んでいた。

「ちっ」

魔女は幾度なく俺に襲いかかり、かわすのがやっとだ。

「ちっ サッカー以外の場所にコイツを使いたくなかったが 仕方ない。」

俺は魔女の前に立った。

「はああああああ！！！！」

剣城の背中から何やら影のようなものが出現し、そして人のような体になり、その影が消えて出現したのは、騎士甲冑を纏った戦士だった。

「な・・・なにこいつは」

「なんだよ？ あれは」

「・・・すこい」

「あの子・・・一体」

「・・・・・・・・・・」

「劍聖 ランスロット!!」

化身ランスロットを見た4人は驚き、キュウベえはただ黙って、それを見ていた。

「これで決める!!」

俺はクリームの下で埋もれてあるあめ玉を足で取り出して、それを魔女に目掛けて、蹴った。

「ロストエンジェル」

この力は化身ランスロットがないとできない必殺技であり、シュートを打った時、化身ランスロットは魔女に向かって剣を突きつけた。

「うおおおおおおお!!」

俺のシュートとランスロットの剣で魔女は真っ二つに切り裂かれ、消滅した。

「うっ」

突然周りが光り出し、俺は目をつむった。

「!？」

光が収まった時、俺は何故か元の世界、雷門病院のベンチの所で寝ていた。

-----

数日が立ち俺は雷門中で次の試合に向けて練習をしていた。

あれから、なにもなく今日の練習日を迎えたのだった。

ただ何故かポケットには……中は空っぽのグリーンフシードがあった。

ほむらの話によるとグリーンフィードは魔女の中にあるものであり、それを彼女たちほむら含む魔法少女達がソウルジェムというもので黒く染み付いた時、グリーンフィードでその染み付いたところを消すらしい。だがこのグリーンフィードは中は透明で空っぽであり、俺にとってはガラクタに等しい存在だった。

「……ここがあなたの世界なのね」

「!?!」

後ろの方からほむらの声が聞こえたような気がして、後ろを振り向いたが、何もなかった。

「剣城く!?!? 練習始めようよ」

聞こえてきたのは、俺にとって悩みの種である松風 天馬が俺を呼んでいた。

俺は思った。あの1日は俺にとっては夢か現実かとわからない。みんなに言えば、ただの夢だと判断するだろう。それにもう二度とあの世界には行けないだろう。だが俺はこの世界で……こい

つら・・・雷門と・・・兄さんと・・・一緒にサッカーをやるそれが  
俺の思いだ。

(後書き)

初めての短編面白くなかったら、面白くなかったでいいです。今の目標フォーゼ頑張る。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1681y/>

---

剣城京介と魔法少女

2011年11月16日13時51分発行